建白書　その三

「教育改革に關し首相に訴ふ」を讀む

昭和四十一年「潮」六月號

各章の要点

一．・教育の改革は一文部省の手に負へるものではなく
國家目的・國策の大本に基いて行はるべきもの

・戦後教育の矛盾とは

戦後アメリカ教育使節団の調査報告書に基き、
戦後の学校教育体系と教育基本法の内実と
精神が定まった
←
〈日本教育委員会〉　〈文部省〉

占領軍により設置され、
協力した

警機関に遠ざけられた

為政者の立場から
文部省(行政機関としての
権限を主張

失地回復を目ざす動き、

・レッドパージ
・教育委員会任命制
・勤務評定

大学の自治・学問・教育の
自由を主張
←

この精神が

日教組およびその
御用学者に引継がれる。

対立

…
etc

※戦後教育において、その出発点で、大学人・知識人・学者達が、為政者の立場から文部省(行政機関としての権限を主張するという形が作られてしまい、以後文部省の教育政策と事毎に対立、「国民のための教育」は忘れられてしまった。

二、

・大学人は、学問、教育の自由、大学の自治を主張するが、どこまで真剣に考えてゐるのか。

・学問は真理に道を通じてゐるといふ学問に対する迷信、狂信からどこかうまれたか。

学歴 → 立身出世
学問 → 永遠の真理 ＼ 混同してしまふところに問題がある。

・「修身斉家治国平天下」の儒教思想に基く学問の概念

西洋の学問の概念 ＼ 異質なのだ

・修身斉家治国平天下 ）個人のエゴイズムを抑へる ）学問を実生活の手段視する方便論
真理探究

← 内発的な学問と外発的な教育を混同する

勝昧な海舶の今日もなほ続く。

・明治初年　近代化のための

教育は軍、官に次ぐ第三軍の役割を演じさせられた。
そして今日もなほ進歩主義のための第三軍であるのだ。

※ 大学人・知識人の多くが、西洋の学問の概念を正しくとらへられず、「迷信」「狂信」からの解放のための学問を確立できず、自らの居心地の良い場を作るため、学問を聖域化した。

(2)

三、

・「学制」に内在する学問・教育の理念に
そもそもの禍根がある。

・近代化の手段としての教育

一、國民皆学 ⇒ 義務教育・教育の機会均等という
近代思想の表れ

二、単線式教育制度

←

学校教育萬能の思想および社会がある。

←

大学という観念の虚像を形成したものは
近代主義・進歩主義の文化観である。

・明治の「学制」も、戦後の六三三四制も、共にアメリカの
教育体系や教授法を模倣しながら、本家とは似ても
似つかぬ形式主義に陥したものとなってねた。

P.50

P.57

四、

・首相にお願ひしたいこと

明治以来百年に亘る日本の近代教育の理念と
制度とを再検討していただけないか。

(近代化のための教育という教育観を検討して貰ひたい。)

・國を挙げて近代化に夢中になってきた。
そして世界が驚嘆するほどの実績を挙げてきたにも
かかはらず、今日の日本人の心に穿たれた空洞は
如何ともする事ができない。

・日本人固有の文化が犠牲となったのだ。

・今日もなほ残された最小限の文化がある。
自然・國語・歴史がある。

・その文化の存在に気附かねばならず、その文化に附き合う事によって、その教えを受けねばならない。

・教育に文化を生育らせてはならない。

↓

文化省・中央教育廳設立後に
夢の様な理想論を構想して欲しい
御参考までに、私見を箇條書にして置く。

※恒存の私見十ヶ條の意図するところ

一、学校教育萬能思想 および 大学という観念の虚像の打破。

二、「学士」の学識水準の確保

三、勉強したい者が、勉強したくなった時、いつでも能力に應じて それが可能である。（機会均等）

四、早期英才教育に予算をつぎ込め

五、國民学校前半においては基礎科目のみ教へよ。
（基礎学力をつけさせる）

六、知育に徹すること。
（無意識の世界に踏み込まぬこと
学校教育の限界を自覚せよ）

七、学校教育の目的
何のための教育かを明らかにする。

八、優秀な教授を育成すべきである。
教授の社会的地位の向上をはかれ。
大学教授は、小学校教諭より、えらいのか。

九、自由大学にて、学問をさせよ。
永遠の真理探究そのものが目的。

十、少数の真に優秀な人文系の学者は、文化省の役人として調査研究に専念せよ。
（学問と教育の分離）

以上の十ヶ条は、とても興味深い提言である。
一見「夢想の様だが、理念原則を明確にした名案と自負してをります」と言ってみる、かこれを読んで、拒絶反応を起こす大学人、知識人の顔を思い浮かべて、内心、面白がってみる、いつも冗談半分の恒存らしい、まさに「名案」なのであろう。
現在、安倍内閣の下で、「教育再生会議」なるものが発足した様である。検討課題は、
教員免許の更新、学校の外部評価導入
いじめをなくすにはどうするか　教育委員会制度の問題点　等々らしい。　相も変はらぬ手直しに終はるのではなかろうか。　あの世の恒存が笑ってゐる様な気がする。　せめて私は、恒存の言ふ、「教育とは本質的には「影響」の問題、「理解」の問題、人と人との「精神的アマルガメイション」の問題である。要するにすこぶる「文学的」な問題なのだ」という観点を、忘れずにゐたいと思ふ。